1. コラム「論点提起」：新たな地平や如何

新年(2022 年)を迎え、コロナ禍も 2 年余を経過した。この間、世界では 2.8 億人が感染し、540 万人が死亡した。ワクチンの累計摂取回数は 89 億回に達しているが、国による格差が大きい。

今回のコロナ禍で日本においては、従来の視座、仕組みに実態とのギャップ、未来へのギャップがあるのが顕になった。今一度、日本の置かれている現実・事実を認識し、日本再生へ舵を切るべきではなかろうか。コロナ禍はそうした事に気づかせてくれる良い機会となっている。

経済構造の歪(1 人あたり GDP 世界 24 位、賃金水準の 30 年間横ばい、購買力/実質実効為替レートの 50 年前水準への劣化、非正規雇用の拡大等)、将来への投資の歪(半導体等先端製造技術力の喪失、先端 IT/AI 技術の周回遅れ、システム/アプリ開発力の劣化、コロナワクチン/治療薬の開発遅れ等)、仕組みの歪(検査・統計の繰り返される改竄、医療崩壊/自宅療養等)　等々。

何故、こうした事態を招来したのか。賃金水準が低下し、購買力の落ちた日本をいつまでも円安にしていいのだろうか。何故、組織/供給者側(企業)対策優先で、個人/需要者側(国民、住民)対策が後回しにされるのだろうか。何故、真の日本創生、地方創生が励起しないのだろうか。

一方で、藤井聡太四冠が AI 超えの 1 手を編み出す。内燃機関エンジン自動車が 100 年を経て、電動モーター自動車に、そして自動運転自動車へと大きく舵が切られた。一般民間人がロシアのロケットで ISS に行き、スマホ/SNS で地球と交信する。スペース X がすでに 3 千基に迫る小型衛星を打ち上げ、宇宙インターネット通信事業が幕開けしている。新しい息吹が感じられる。

もういい加減、過去のしがらみ/旧弊、無責任体質、旧来型仕組みに見切りをつけ、本質/矜持を歪める忖度/不正をやめ、新たな地平に向けて、視座/仕組みを切り替えるべきではなかろうか。

その際、いつまでも一部のステークホルダーによる制度設計でいいのか。これだけインターネットが普及し、多様な一人ひとりの意思表示・集計が可能な時代に、「個/小集団」のレベルでの問題/課題/論点提起を受けとめ、そこに広く関心者も加わり、集合知(ソリューションのオプション)を形成し、それをもって公的な合意形成手続きに繋げるといった仕組みが考えられないだろうか。それを支える受け皿としてのデジタルプラットフォームが考えられないだろうか。

「新しい資本主義」「新しい経済」もいいが、地方の現実を見ると、こうした「新しい社会的合意形成/意思決定システム/民主主義」を考えて欲しいものである。それこそが、「政策 DX」に繋がり、「個」が政策を自らのもとして考え実践する「政策普請」の礎となるのではなかろうか。

「パンデミック後にはイノベーションが興る」ことは歴史が証明している。今般の莫大なコロナ対策費の投入もイノベーションの起爆剤になってこそ、意義がある。コロナ禍後の地方創生の新たな地平は、「個」(国民/住民/需要者等)をベースとした「新しい仕組み」づくりの先にあるのではなかろうか、それは初夢に過ぎないのか、それとも確実な未来への一歩となるや如何。